

『傷風約言』について

花 輪 壽 彦

(一) 緒言

演者は昨年の本学会に於いて名古屋玄医の医学思想について若干の考察をした際、いわゆる「古方派」の特質として従来いわれている如き「傷寒論の重視」「親試実験主義」は必ずしも古方派を包摂する適切な特徴となりえないと述べ、尚古主義を掲げた個々の医家の医学思想とその臨床の実際について逐一検討していきたいと述べた。

本学会ではこの主旨に沿って、後藤良山（一六五九—一七三三）の学風のもつ「傷寒論観」についてその特質を考えたい。『傷寒論』の「日本的」受容の中にこそ古方派の特質があることもまた事実だからである。

とはいうものの、良山には明らかな自書がないこともあってか、良山の傷寒論観は甚だ不闡明である。

弟子達の著わした『師說筆記』や『東洋洛語』によれ

ば、良山の場合は、『素問』『靈樞』『難経』の正語をとり、張仲景以降、宋明以前の諸家の書を涉獵せよというもので、『傷寒論』のみの評価は決して高くないように思われる。臨床に卓越した良山の医療の特色とは食餌療法の重視、灸や温泉の活用・順気剤や熊胆の多用・民間療法の重視などであるとされており、『傷寒論』は重視されなかったとみることもできる。

ところが良山存命中の享保十七年（一七三二）に良山の子・後藤椿庵（一六七九—一七三八）によって書かれた『傷風約言』が刊行されている。この書には既に『傷寒論』の大綱について一家言を以て斬新な解釈が試みられている。この書に良山自身の思想がどの程度まで反映されているかについては定かでないが、良山や弟子の傷寒論観の一端を知り得ると考えるので、ここに若干の考察を試みたい。

(二) 『傷風約言』の概要

『傷風約言』に述べられている椿庵の傷寒論観は次の点で極めて特徴的である。

一つは『傷寒論』の骨子である「六経」（太陽病・少陽病・陽明病・太陰病・少陰病・厥陰病）の排斥である。三陰三陽

は『素問』に仮託した概念で、張仲景がこれを『傷寒論』に取り入れたことを「非なり」と糾弾する。替わって彼は「経証」（分ければ淺証と深証）「閉証」「脱証」という三証の私号を呈示して『傷寒論』の大綱を示す。その理由を「六経弁解」や「傷風大意」から拾うと、要するに抗病反応とは常に身体全体の反応であるとみるもので、何経が病むとか何経に伝経するといった経絡理論と結びついた三陰三陽は無用だというのである。病気とは、一元気の虚に乗じて風寒の侵入によって惹起されるという。その緩急軽重と邪正闘争の虚実こそが病態の相違であるというのである。これは良山の示した「一氣留滯説」によって『傷寒論』を解釈したものには他ならない。

もう一つの特長は、脈診の輕視と腹診の重視である。例えば承氣湯の目標について、「古人、皆脈証によって多く裏熱・裏結を弁ず。而るに予の手を以て、按腹し、直ちに疏究そちゆうを決するに如らざるなり」、「某病に某脈見わるの定規なし。略を知るべきなり」などと記す如くである。

(三) 考案

『傷風約言』の序文には、明末清初の医家として方有

執・喻昌・程応旄・張志総・張璐の名前を挙げて、彼らの註釈は多くは剩語にすぎないと評している。このことは『傷風約言』は明末清初の『傷寒論』・『錯簡重訂派』の議論をふまえて、さらに自己の見識によって『傷寒論』の本旨を既に読みとろうとしていたとみることが出来る。

こうした態度は香川修庵（一六八三—一七五五）にもみられる。『一本堂行余医言』十九「傷風寒」の項にみられる修庵の解説は、「経証」「閉証」「脱証」という言葉はみられないが、その言わんとするところは極めて類似している。

このことはこうした傷寒論觀を良山が弟子達に示唆していたことを示したものとも思われる。しかし『一本堂行余医言』の序文をみると修庵が『傷寒論』の理論が『素問』より出ていることを批判し良山の意見を求めたのに対し、良山は「私もまた久しく旧医説を疑っている。しかしこの問題は古今の一大結構で、私のようなものに決められる簡単な問題ではない」と態度を保留したという。山脇東洋は『東洋洛語』の中で「香川氏の儒医一本説は美しいが、良山先生の説を尊ばない由縁である」と批判的で必ずしも

こうした傷寒論観が艮山によって強く主張されたわけではないことがわかる。

しかし椿庵の孫後藤粟庵の『傷寒瑣言』にみえる「三陰三陽」や修庵の「虚実」をふくめて、後藤流の傷寒論観は『傷寒論』を『素問』から切り離して「傷寒論には傷寒論の世界観がある」とする古方派の傷寒論形成と腹診術の発達に重要な役割を演じていると思われる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室)

崔知悌『骨蒸病灸法』の伝承

について

——崔氏四花灸法の由来——

石原 武

現在の鍼灸医学書に載せられ、実際の治療に応用されることもある四花灸法は、一般に崔氏の法といわれているが、その出典については必ずしも明らかではない。そこで今回その出自と伝見について調査を行ない、若干の知見を得たので報告する。

『旧唐書』経籍志、『唐書』芸文志には当時存在した医書が多数載せられているが、このうち崔知悌『骨蒸病灸法』一卷の名が見えている。また『宋史』芸文志や『通志』芸文略にも『崔知悌灸法』一卷とある。いずれも現存しないので断定はできないが、おそらくこれらは同一の内容をもつ書と推察される(以下『崔氏灸法』と略称する)。このことから、同書は宋まで伝わったことが窺える。